

三菱庭球同好会と古賀会長

「三菱庭球同好会」は、1922(T11)年のHIロンドンカップ創設を機に組織され、翌年、大会委員長、委員が任命された。運営は、岩崎彦彌太氏の強い御支援の下、同好会員からの会費で、全国大会等を行っていた。

1952(S27)年にHI盃が復活して以降、本大会は彦彌太氏を戴くグループ結束の象徴的スポーツ大会として、総務部主体、同好会協力のような形で運営されたが、幹事会社は、毎年ルールなしに各社長参加の宴席で決まり、人的労力、費用負担はかなりのものであった。1967(S42)年9月、彦彌太氏が御逝去され、その後、二度のオイルショック等を経て、各社も厳しい経営を迫られる時代の流れの中で、大会の運営に対してグループ各社間で温度差が出てきた。

1974((S49)年、重工古賀繁一社長が同好会会長に就任し、以降10年間(大会委員長としては8年間)務められた。古賀会長は、就任後、運営課題を認識されるや、HI盃委員に対し「HI盃大会の伝統を守りつつ、グループのスポーツ大会として、あるべき運営ルールをつくること」と命じられ、その検討結果を1975(S50)年の金曜会で提案し、現在の運営を形作られた。



古賀繁一氏

1. 全三菱庭球大会の大会委員長は、庭球同好会長が務めること。庭球同好会は試合の運営、進行をすべて行うこと。
2. 幹事会社は、担当順番を定めることとし、8グループに分けて全社に分担いただく。幹事会社総務部門には、大会の設営、進行をお世話願ひ、代表役員の出席を頂く。総務部門にて分担頂いている費用は、スポーツ大会として質実簡素を旨として予算編成する。

古賀同好会長は、昭和57年に商事の田部文一郎会長に引き継がれたが、その際、「三菱庭球同好会長とは、全国全社の三菱人をまとめ、共にあろうという岩崎彦彌太氏の志を継いで、岩崎さんのカップを護って行く役目であるから三菱グループを代表する幹部に引き継いでゆくこと」を不文律として申し送られた。古賀会長は、戦艦武蔵の建造副主任(三菱の責任者)を経験され、重工の社長は急逝された牧田社長の残任期間の1年半を務めて退任された。活淡として“筋を通す”方で、常に「初めに帰って正道を求め、然も、公正に禍根を残さず、終わりの万全を期する」という、三菱精神の権化のような方でした。また、テニスは中学時代からの愛好者で、頑健にして超酒豪、1971年に訪中の際、周恩来首相ほか中国要人と、数え始めてから老酒39盃を乾杯されたのは語り草である。